



学校だより

末子配付

第3号ジャカルタ日本人学校
令和3年(2021年)6月30日
校長 緒方克行
TEL: 021-745-4130

ピンチをチャンスに

「校長先生、お願いがあります。委員会活動をやらせてください。」

6月18日お昼過ぎに中学3年生代表の4名が校長室を訪れました。

好奇心の塊の小学校1年生が、担任の指導を受けながら校長室を訪れた時とは異なり、礼儀正しく自ら挨拶と礼をして入室してきました。さすが中学生だと感じました。

なぜ、委員会活動をやりたいのかと質問すると、「昨年度は全く活動ができず、来春には自分たちも卒業してしまい、中1の時に見てきた委員会活動を学校の伝統として引き継いでいきたいからだ。」と話しました。今年の中学2年生の後輩は、昨年委員会活動を経験できなかったのも、コロナ禍前の通常活動を知っているのは自分たちしかいないという思いは、状況をしっかりと掴んでいると感心しました。

また、このようなコロナ禍の中で活動を進めるということは、制約や問題が多く立ちは大変だと思うが、あきらめない覚悟はありますか、と問うと「あります。」と落ち着いた声で返ってきました。

伝統を引き継ぐと言っても、コロナ禍ではこれまで通りではいけないこともあるため、新たな発想で活動を作り出さなければなりません。

例えば放送委員は、昼食時、各自がお弁当を放送室に持ち込み生放送を行っていました。それが今は黙食でしなければならず、どうしたらよいか、などです。

この提案を聞いて、コロナ禍での学校生活の工夫は、子どもたちの学習の教材になると考えました。委員会活動や運動会・JJS フェスティバルなどの行事は、教育活動全体の中で特別活動という学習に位置付けられています。そこでは、「様々な集団活動に自主的・実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団の生活上の問題を解決する。このことを通して、問題解決力や人間関係を構築する力など『生きる力』を育成することを目指す。」(要約)とされています。

コロナ禍の中で、生活をより過ごしやすいものへ改善していく活動は、子どもたちにとって切実な問題となるために、おのずと自主的・実践的な取組となり、生きる力をしっかりと培うこととなるでしょう。子どもたちの発想は、まさにピンチをチャンスに変えたこととなります。

4名の子どもたちには、他にもいくつかの質問をぶつけてみましたが、皆しっかりと私の目を見て胸を張って答えてくれました。もちろん、委員会活動の開始は、許可しました。子どもたちの手によって進められる取組が、JJS 全体の今の学校生活を少しでも過ごしやすく、楽しいものにしていくことにつながることを期待したいと思います。

小学部の委員会活動も、夏休み明けの開始を目指しているところです。そこでも、問題を解決する生き生きとした子どもの姿をきっと見せてくれるでしょう。